

県中教研 技家(家庭)部会だより

第 37 号

発行日 令和4年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 角谷 雅子
題 字 金山 泰仁 先生

今こそ知恵を絞り、授業構想、教材開発を！

主任指導主事 萩中 弘恵

令和3年度もコロナ禍での教育活動が続きましたが、創意ある授業構想や工夫を凝らした教材開発をされている先生方との出会いを通して、多くの感動をいただいた1年でした。特に、1人1台端末の効果的な活用に向けた実践からは、前向きに取り組む先生方一人一人の強い意欲を感じました。また、富山県で開催された東海北陸地区大会では、家庭分野の授業に携わる先生方が一同に会し、より専門的な学びを得ることができました。

新学習指導要領では、実践的・体験的な活動を通して資質・能力を育成すること、また、課題を解決する力を育成するために一連の学習過程を題材に位置付けることが重視されています。

コロナ禍のため、調理実習や幼児、高齢者との触れ合い等が叶わず、指導に苦慮された学校が多い中、リモートやインタビュー映像の視聴等、各学校では様々な取組がなされていました。このような間接的な体験であっても、工夫次第で生徒の問題意識を高める契機となったり、自分事として考える活動につながったりします。これまで実施してきたことが、今後同じ形や方法で行えるという保障はありません。そのため、生徒の問題解決の過程を充実させることができるよう、今こそ原点に立ち返り、指導事項を踏まえた授業づくりに取り組む必要があると感じています。

「どうすれば生徒の学びを保障できるか」「どうすれば実現可能なのか」今、求められているのは、新しい視点で知恵を絞り、授業を創造していく教師力です。各地区の今年度の素晴らしい財産（授業構想、開発した教材等）を共有するなど連携を密にし、教師一人一人が自らの視野を広げ、授業づくりを楽しんだり授業改善に努めたりすることを通して、コロナ禍でも諦めることなく、家庭科教育が一層充実・発展していくことを願っています。

（西部教育事務所）

コロナ禍における研究方法の工夫を体験して

部長 角谷 雅子

新型コロナウイルスの収束が見えず、様々な学習活動の制限等がある中で、今年の研究大会は、7年ぶりに「東海北陸地区中学校技術・家庭研究大会」を兼ねての開催でした。

研究大会の開催方法は、県内部員はサンフォルテに集まり、事前に業者によって撮影及び編集された授業を視聴し、県外の方はオンラインでの参加となりました。これまで、実際に授業を参観し教師の発問や生徒の変容等を議論してきた自分にとって、ビデオ視聴による授業研究には、正直なところ不安がありました。「生徒の活動の様子や考えの深まり等をどこまで掴めるのだろうか」、「有意義な研究協議会ができるものだろうか」などの思いの中、着実に研究大会の日が近付いてくるのを感じていました。

私は西部地区授業の担当である射水市部員として、撮影当日から生徒の記録等に携わりました。撮影したばかりの授業ビデオを視聴して、射水市部員で「さすがはプロ」と声をそろえたことを思い出します。大がかりな機材とプロの撮影技術により、映像、音声とも授業の再現を見るかのようなものでした。班の話し合いの場面では、生徒同士で課題解決に向けて対話する様子がクリアに伝わりました。私は「これなら研究大会当日も大丈夫」と確信し、ほっとしたことを覚えています。研究大会後には、東部西部両地区から「授業動画は分かりやすい」「ビデオ視聴スタイルがよかった。来年度以降も継続を」の意見も聞かれました。

しかしながら今年は例外であり、今後も今年の形で進めていくことが「最適な解」というわけではないでしょう。ただ現時点で予測していない方法も含めて、これから全会員で知恵を絞り、より研修が深まるスタイルを模索していくための第65回研究大会となったのではないかと今振り返っています。

（射・射北中）

第65回 研究大会報告

東 部 地 区

(富・水橋中)

富山市立水橋中学校において青木八千代教諭による研究授業を行った。「和食のよさを生かしてけんちん汁をバージョンUPさせよう」という学習課題のもと、一回目に行ったけんちん汁の調理実習の反省やよい点を生かしながら、けんちん汁をバージョンアップさせるためにグループでの話し合い活動を行った。本授業では、だしに関する授業や日常食の調理の振り返り場面で、和食のよさを繰り返し問い、考えをまとめた思考ツール「フィッシュボーン」を活用した。この思考ツールを基に、和食のよさを意識しながら二回目のけんちん汁づくりに向けた話し合いを行うことができていた。特に、和食のよさを生かしてけんちん汁をよりよくする方法を考える場面では、学習形態の工夫や学習専用端末を用いて他の班の意見を参考にしながら話し合いを進めることで、和食のよさについて、考えを広げたり深めたりしながら調理実習計画を完成させていた。また、二回目のけんちん汁作りに生かしたい工夫点を発表し共有する場面では、教師の問い返しにより、理由を大切にしながら、考えを深めることで、和食のよさを生かしたけんちん汁をつくるために意欲を高めた生徒の姿が印象的な授業であった。



吉田みづき指導主事(東部教育事務所)からは、題材一つ一つで身に付けた力が積み重なって目指す資質・能力が育成されるという意識をもって、3学年間の指導計画を作成したり、指導と評価の計画を適切に立てたりすることの重要性について助言をいただいた。今後は生徒の実態に合わせて、領域や題材のつながりを考えた指導計画を工夫することや適切な評価方法について研修を深めていきたい。

草原亜希子(富・新庄中)

西 部 地 区

(射・大門中)

射水市立大門中学校において平和章教諭による研究授業を行った。事前アンケートで把握した高齢者との関わりの経験を導入で確認した後、アニメーション動画で高齢者のスーパーでの買い物場面を視聴した。その上で、高齢者が困りそうなことに対して、自分ができることを考えた。「高齢者の方と関わる者として…」と理想論を話す生徒も最初は見られたが、それに対して、「本当にそれできる?」「知らない高齢者にもできる?」と教師からの問い返しを行い、視点を焦点化した話し合いにより、真剣に自分の生活を想起して考える班での話し合いにつながっていった。「断られたらつらいよね。まずは、声をかけてみようか」「近くにいるだけでも安心してくれるかもしれない」など、生徒一人一人が自分事として捉え、主体的に取り組もうとする姿が見られるようになった。終末では、高齢者福祉施設職員の方のインタビューを視聴した。「分かってほしい」という高齢者の気持ちを知り「まずは声をかけることからしたい」など、積極的に関わっていこうと考える生徒の変容が見られた。



萩中弘恵主任指導主事(西部教育事務所)からは、

- ・今後、各班での話し合いの成果をどのように学級全体で共有していくかの検討が必要である。
- ・新学習指導要領の全面実施に伴い、改めて小中高の内容の系統性が明確になった。小学校でどのような学習をしてきたかを踏まえ、系統的及び総合的に学習できるよう、題材を設定する必要がある。などの助言をいただいた。

今回の授業は、新設の項目であり、まずは、指導事項をしっかり確認した上で進めた。コロナ禍の今、触れ合う活動ができず、変更を余儀なくされた。今後もこのような状況が続くことも視野に授業の工夫が一層必要になってくると思われる。

二川 昌子(射・小杉南中)